



トキメキファンタジー
フ★ア★ム★

プロローグ

声が聞こえる。

少女の泣いている声が。

うずくまり、小さく震えながら泣いている少女の姿がみえた。

—どうして泣いているの？

少女の隣にもう一人、同じ歳くらいの少女がいる。

彼女は何も言わず、泣いている少女に背を向けたたずんでいる。

—何があったの？

私の声は届かない。

私には何もわからない。

だけど、不思議と二人の気持ちがわかる気がした。

私は彼女達を知っている。

声が聞こえなくなった。

泣いていた少女が静かに立ち上がった。

もう一人の少女のほうを少しだけ振り返る。

そして、視線は合わないまま...二人は別々の方向へと歩き出した。

—待って、行っちゃ駄目だよ。行かないで、イ...

私と仲間と旅の休憩。

「...ハル！おい、チハル！」

「ふわっ」

「あ～！やっとちーちゃんが起きた～！！」

あれ...少女達は...？

「眉間にもものすごいシワ寄せて寝てたけど大丈夫だったか？」

「ちーちゃんの顔はシワシワでも凛々しいからだいじょぶだよ～！」

「おい、それは褒めてる事にならないと思うぞ。」

あれ...どんな夢をみてたんだっけ...

「ごめん...ちょっと変な夢みちゃって...」

「ふむふむ、豪華なご馳走にありつく瞬間にお約束の夢オチっかよ！って展開だったわけねっ」

「う～ん...そうだったかなー...」

誰かに何か伝えなきゃいけなかったような...

「もう朝ご飯は出来ている。とっとと食べて出発するぞ。」

「今日はあたしが腕によりをかけて作りました～！！」

「また...これでもかと砂糖ぶち込んである料理だろ...」

「あたり～！キャナのスイートスペシャルですっ」

まあ、いっか。早く朝ごはんを食べなくちゃね。

私の名前はチハル。

平凡な人間で、平凡に女子高生というものをやっているはずだった。でもあるとき不思議な夢をみて、気がついたら見ず知らずのラテールワールドへ。

<イリスをいう少女を探す>

それが私がココに呼ばれた理由。最初は絶対に夢だと思ったし、心の病にでもなったのかとも思った。だけどココは確かに存在している世界で、私だけではなく何人もの人が急にこの世界に飛

ばされていた。みんな課せられた使命は同じ。イリスを探し出す。そのために彼女に呼ばれたのだ。どこにいるのかわからない、何をしているのかもわからない。そんな人間を探し出すなんてどうすればいいのか。途方にくれていた私に声をかけてくれたのが彼らだ。

「俺はいつ糖尿病になるか不安で仕方が無いぞ...」

少しローテンションなこの青年の名前はクロム。

この世界で、初めてモンスターに出会ったときに助けてくれた事がキッカケで一緒に旅をしている。

あんなにかわいい生き物がモンスターだったなんて。ファンタジーの世界は思ったよりシビアだ。

元々彼がいた世界にもモンスターがいたらしく、そして旅の知識にも長けている。頼りになるお兄さんという感じだ。

「ん～！！やっぱり卵焼きはお砂糖たっぷりに限るよね～！！」

そして、少しテンションの高いこの少女の名前はキャナ。

いきなり知らない環境に放り出され、おろおろするだけだった私に一番最初に声をかけてくれたのがキャナだ。

いつも元気いっぱい甘いものが大好きでそしてものすごくマイペース。見た目はかなり幼いのだが...なんと私より年上、らしい。私達の事を <ちーちゃん><くーちゃん> とあだ名で呼ぶ。彼女がいるおかげで不安いっぱいの旅も楽しく続けられている。

「くーちゃん！くーちゃん！今日はどこに行くかもう決めてるの～？」

「くーちゃん言うなッ！俺はもう“ちゃん”って歳じゃないし恥ずかしいって言ってるだろッ」

この世界にきて半年ほど経つ。

イリスの足取りを追って旅を続けているけれど、彼女の居場所は依然わからないままだ。

私の元いた世界は今どうなっているのだろう。私はこれからどうなるのだろう。

イリスを助け出すなんて事、私には荷が重過ぎる気がする。そもそも私達以外にもたくさんの冒険者がこの世界に召還されているのだ。私達が頑張る必要なんてないんじゃないだろうか。

「今日は新しい探検はやめてみんなでゆっくりすごそうよ～！」

「はっ！？お前何言ってるんだよ。」

「だって～たまにはゆっくりしないと！だよな？ちーちゃんっ」

「えっ？あ、うん。」

「駄目に決まってるだろ！今日もイリスの足跡を探すんだ。俺たちは何のためにココにいると

おもって...」

「くーちゃん！！！！！」

「！」

びっくりした。キャナがこんなに大きな声を出すなんて初めてかもしれない。
あまりの突然の出来事にクロムもかたまっている。

「今日は冒険はしないの！ねっ決定だよ？」

そしてじっとクロムを見つめる。相手の目をただただ見つめ続ける。そして不意にニコッと笑う。

私達はこの笑顔に弱い...いつも最終決定権はこうやってキャナにもっていかれてしまう。

「ふふっ」じゃあ、ご飯のあとで今日どうするか決めようねっ」

そういうとキャナは残っていた激甘の紅茶を一気に飲み干した。

「う～ん！やっぱり甘味は最強だよっ」

花と笑顔と思いやり

「ちーちゃんちーちゃんっ！ちょっとこっち来て」

突然キャナに腕を引っ張られる。

今朝の片付け担当はクロムなので、少し散歩でもしようと思っていたのに。

「わわっそんなに慌ててどうしたの？」

「しっ...！くーちゃんに聞こえちゃうからもっと小さい声でっ」

クロムからは見えない位置へ。そこで小さく縮こまる。私も隣にしゃがみこんだ。

「ね～、ちーちゃん。ちーちゃんは何か良い息抜きの方法知ってたりしないかな？」

「息抜き...？」

「ほら、くーちゃんて...いつもイリスイリスって言ってるでしょ？」

「そういえばクロムは毎日必死だねえ。」

そうなのだ。彼は私達の誰よりもイリスの事を気にかけている。

みんなイリスに呼ばれ、そしてこの地に来た。当たり前と言われれば当たりの事なのかもしれないけど、それでも彼のイリスへの執着はすごい。元々情に熱いタイプのように、使命に燃えているってやつなのかもしれない。

「くーちゃんは毎日いつもイリスを助けなきゃって思ってる。」

「でも私達はそのためにココに来たわけでしょ？」

「そうだけどっ...あっ、別にイリスを助けちゃ駄目って言いたいわけじゃないよ～！」

「むむ？」

「くーちゃんはちょっと思いつめ過ぎなんだよ～...このままじゃくたびれておじーちゃんになっちゃうかも...」

お、おじいちゃん！？なんとなく言いたい事はわかるけど...本人が聞いたらなんていうだろう。

「う～ん、つまりクロムに『たまには旅の目的は忘れてくつろいでもらいたい』って事かな？」

「そうそれっ！さすがちーちゃんは話がわかる～」

なるほど。それはいい考えかもしれない。

正直、私自身もこの旅の意味に不安を持っていた所だった。

いったいどこまで行けばいいのか。いつまで続ければいいのか。

その答えどころか、そもそも何故私がやらなくてはいけないのか。先ほどそう考えたばかりだっ

だから。

「それにちーちゃんも疲れてるでしょっ？」

キャナが私をみて小さく笑った。

「えっ」

「ちーちゃんもちゃんと息抜きしなくちゃ駄目なんだからねっ」

彼女はやっぱり...なんでもお見通しだ。とても幼く見えるのに...本当は一番しっかりしている。私はクロムの事をなんとなく気付いていて...でも人を思いやる余裕なんてなかったのに。私達はきっと彼女に一生敵わない。

「そこでっ、話を戻して良い息抜きの方法を考えないとね〜！」

「息抜きかぁ。カラオケとかあるといいのにね。」

「カステラ...？確かに甘くて大好きだけど〜...どこでも食べれるよ？」

しまった。キャナのいた世界にはカラオケはなかったのか。

「ひあ、う、うん。そうだよ。なんでもないひょっ！」

元々住んでいた環境がまったく違うのだから、この程度のギャップは良くある事なのだけど...それでも会話を外してしまうと恥ずかしい。声...裏返っちゃったかな...

「あたしはね〜ピクニックがしたいなっ！みんなでお花畑にいったらお弁当食べるの〜！」

「うーん、ピクニックかー。でも毎日景色のいい所でお昼ごはん食べてるよ？私達。」

「ガーン！」

「でも提案するのは良いんじゃないかな？他にゆっくり出来そうな事は思いつかないし。」

「わ〜い！くーちゃんの許可もらいにいこ〜っと)」

キャナがかけてゆく。

ピクニックなんて何年ぶりだろう。この世界にくる前もずっとそんな事忘れていた。

そもそもココに来る前の私は学校に通い、そして陸上競技に熱中していて、毎日毎日自分の記録に追われ、景色を楽しむという考えすら持っていなかった気がする。それが当たり前で、でもそれはそれで充実していたのだけ。

今の私は、昔の私からは想像もつかない生活をしてる。どれだけ遠くに投げられるか競い合っていた槍も、今はモンスターを倒すための武器。最初はこんな事したら先生に怒られる！なんて思

ったりもしたっけ。

そういえば、キャナも初めて魔法を使ったときは大騒ぎしてたなあ。キャナのいた世界では魔法は妖精の使うものだったらしい。私からしたら妖精がいるって事だけでもう驚きだったけど。逆にクロムは初めから短剣の扱いが上手くて...だから、てっきり元からこの世界にいた人だと思ってた。ついこの間の事なのにずっと昔の事みたい。なんだか少し不思議な気持ちだ。

「くーちゃん！今日やる事決まったよ〜！！」

キャナの声が聞こえる。私も二人のところにいかなくちゃ。

ちょうどクロムは朝食の片づけを終え、一息ついていた所だった。
とびっきりの笑顔。少しもったいぶってキャナが言う。

「今日やる事は.....ピクニックで〜すっ！！」

「んあ、ピクニック！？」

「うんっ！そうだよ〜！！みんなでお弁当もってお花畑でキレイなお花をみながら...」

「却下だ。それならイリスの情報を集めながら花を探して、そこで昼飯にすればいい。」

「ガーン！」

あー...やっぱり。さっき私達でこんなやり取りをしたばかりだ。

「う〜...ちーちゃ〜ん...」

キャナがこっちをみてる...なんとか助けてあげなくちゃ。

でも、なんていえばクロムは賛成してくれるのかな。

「だいたい、花なんてそこらじゅうに咲いているだろう。わざわざ花を見るためだけに時間を採らなくても...」

ふと、もといた世界の景色が私の頭に浮かんだ。そうだ、これしかない。

「ピクニックが駄目っていうなら...お花見をしない？」

「「お花見？」」

二人が同時に聞き返してきた。

「私が住んでいた世界では、というか私の国だけなんだけど...春になるとお花見っていうのをし

ていたの。」

「」

「うーん...ちょっとだけ違うかな。以前アオイチに行ったとき、街中にピンクの花が咲いていたでしょ？」

「ああ...桜とかいう花だったか。」

「その桜が私の国の象徴だったの。桜の花が咲くと、木の下で花を見上げながらご飯を食べたり、お酒を飲んだりして。あとは、お祭りをする場合もあるよ。とにかくみんなが楽しみにしてるのがお花見なんだ。」

「うっわあ〜！それってすごく素敵だね〜！！」

キャナのほうが興味津々。でも、クロムも少しだけ興味を持ってくれたみたいだ。

「結局、花畑でのピクニックとはどこが違うんだ？」

「たぶん、一緒。」

とたんクロムの顔の力が抜けた。

「はあ...それじゃあ意味がないじゃないか。」

「ああ、でも下じゃなくて上を見ながら...だよ？」

「そ、そういう問題なのか...？」

「私のいたところでは桜は一年のうち少しの間しか咲かないんだ。桜が咲くと、それだけでみんなとても楽しそうになる。」

私の頭の中には桜で埋め尽くされた川原の様子が浮かんでいた。

手を繋ぎ歩く親子。微笑みあう老夫婦。走り回る犬とそれを追いかける人。

桜の下ではみんなが笑顔だった。それを思い浮かべるだけでなんだか嬉しくなった。

「だから、大丈夫。絶対にクロムも笑顔になれるよ。」

「それは俺がいつも怒った顔だと言いたいのか...」

ちょっと恥ずかしそうにクロムが言った。

「お花見しよしよ〜っ！アオイチならちょっと戻った街のタウンポータル使えばすぐだし！」

キャナはもうやる気満々だ。

「どうせだからユキナさんやユラちゃん達もみ〜んな誘ってどど〜んとやっちゃお〜！！！」

「そうだね、決まったからには早く準備ないとね。」

「お、俺はまだやるとは言っていないぞッ！」

「は～い、くーちゃんグダグダ言わな～い！」

アオイチの桜は一年中咲いていると聞いたので今日も満開の花をみせてくれるはず。

我ながら良い案を出したものだ。

普段はあまり桜のことなんて考えていなかったのに、今は桜が見たくてしょうがない。

「まるで桜に恋してるみたい。」

「ん？ちーちゃんなんか言った～？」

「あはは。なんでもない！さ、出発しよ。」

そして私達三人はアオイチに向かった。

姫と侍と桜泥棒

お花見をするためにアオイチに向かった私達。

だけど、私達は今...説教をくらっていた...

「お前達はわかっているのか!？」

「だから～違うんですってば～!!!」

「誤魔化そうとしたって駄目だっ!」

「ちょっとはあたし達の話も聞いてください～!!!」

「おい、俺たちいつまでこうしれてばいいんだ...？」

さかのぼる事一時間前...

アオイチに着いた私達は桜の花を見るためのベストポジションを探していた。

花が良く見えて、少し広くて、そしてなるべく木や根を痛めないような所が良い。

「ちーちゃんここなんかどうお？」

「お一日当たりもいいし、いいかもね。」

「だがここだとすぐ近くにモンスターがいるぞ？危ないんじゃないか？」

こんな風にお花見に最適な場所を探していたんだけど...

「お前達一っ!!!そんなところで何をしている!？」

暑苦しい声が聞こえたような。

「ふえっ今どこからかむさくるしい声が聞こえたよ～？」

「む...俺はこの声に聞き覚えがあるぞ...」

「私もなんだか嫌な予感がする。」

「このシゲオの目の黒いうちは桜は渡さーん!!!」

あああ...やっぱりあの人だ...

「正義についてッ、私と語りあわせてやるー!!桜泥棒ども、覚悟はいいかーっ!!!」

「シゲオさん!私達桜を盗みに来たんじゃないっ」

「問答無用ー！！！」

「おい、チハル事情を説明してやれ...」

「あ、あのシゲオさん、実はですね、私達おは...」

「くらえっ！千変万化！神力絶対！如意神秘！無双類進！展五の白鷗式っ！！！」

「ひええ〜っシゲオさん話全然聞いてな〜いっ」

そんなこんなで...一時間以上に渡ってこの様なやり取りを続けていたってわけ。

でもだいぶ堪えてきた...本当にいつまでこうしてればいいんだろう...

そんなときだった。

「シゲオ殿、一体何事か？」

「おお、ハヤト氏！」

「あ、ハヤトさんだ〜！ハヤトさん助けて〜！！！」

ハヤト。アオイチの街に住む浪人で、以前黒月城の内部について教えてくれた人物。

私は...この人が苦手だ。

「まったく...シゲオ殿は早とちりしすぎだ。」

「はーはっはっは！すまんすまん！！」

「もうっ笑い事じゃないんですからねっ！あたし達の一時間を返してくださいっ！」

「はっはっはー！私のこの笑顔に免じて許してくれ！はっはっはー！！」

「でもハヤトさんが来てくれて助かったな。な？チハル。」

「へえっ！？ああ、そうだね。」

「そんなびっくりした？おかしなちーちゃんっ」

どうして苦手かという...それは単純な理由。

『ハヤト』という名前が...私の兄と同じ名前だからだ。

とはいっても、一緒なのは名前と眼鏡だけで見た目も性格もこっちのハヤトが圧勝。

ただ、どうしても名前を聞くと恥ずかしくなってしまう。

完全にこっちの主観で申し訳なく思うけど、やっぱりどうしようもない。

「お花見か。そういえば拙者も今年はまだしていなかったな。」

「じゃあハヤトさんも一緒にやりましょ〜！あ、シゲオさんもどうですか？」

「桜についてっ、私と語りあわ...」

「花見をするのはいいが、ひとつ問題があるな。」

「む？問題だと？」

ハヤトは腕組みをして答えた。

「敷地内で大人数がどんちゃん騒ぎとなると...さすがに城の許可無しという訳にはいかないだろう。」

普段アオイチの人達は、常に桜に触れ合っているため、特別にお花見などはしないのだそうだ。年に一度街をあげてお祭りが行われるが、その時以外はみな個人個人で桜を楽しむ。それがアオイチのスタイルらしい。

「毎日桜がみれるんですもんね。当たり前と言っちゃ当たり前か。」

「え～！お花見中止なの～！？」

「残念だな...」

「やだ～！お花見したい～！！」

私もせっかく来たのにお花見が出来ないのは残念だ。

どうにかならないのかな。

「黒月姫殿に許可をとれば可能だとおもうが。」

「ホントっ！？」

「あの気難しいお姫様か。」

「私達が行って...許可...下りるのかな...」

アオイチの真ん中にそびえたつ大きなお城。それが黒月城。

そしてそのお城に住んでいるのが黒月姫。この街のプリンセスだ。

私達はイリスの足跡をたどる旅の途中、彼女を訪ねた事がある。

黒月姫は二年前、イリスと一緒に世界救済の旅をした仲間だったからだ。

—ええい！うるさいうるさい！

—イリスなんて名前聞きたくもない！！

何故か黒月姫はイリスをととても憎んでいて、イリスの事を聞きに来た私達の事も嫌っているようだった。

何人もの冒険者がイリスの事について尋ねてくる。確かに疲れているのかもしれないが、きっとそれだけじゃない。

旅の途中であった事。おそらくイリスの失踪に深く関係してる事。私達が一番知りたい事こそがその原因になっている。

あのときは、丁寧に謝って帰ってきたけど...私達の事を覚えていたら許可なんて下りないんじゃない

ないだろうか。

確か、ハヤトにもそのときの状況は報告していたはずだったけど。

「貴公等の事情はわかっている。」

「許可下りるのかな〜」

「大丈夫だ、拙者が行けば問題ないだろう？」

「ええっ！ハヤトさん行ってくれるんですかっ！？」

「ああ、我がアオイチの美しい桜に感動した冒険者達にしばしこの地で過ごす許可を。とでも行っておけば良いだろう。」

「結構テキトーなんですね。」

「要は許可が下りればいいのだろうか？」

そう言ってハヤトが笑う。この人もこんな笑顔を見せるときがあるんだ。

「拙者も桜には色々思い出があるからな。花見は楽しみだ。」

「じゃあ、許可のほうはハヤトさんに任せて俺たちは準備をしようか。」

「おっけ〜！」

「それでは後でな。」

城のほうに歩いてゆくハヤトを見送る。そのとき、何故か私は今朝見た夢を思い出した。

泣いている少女に背を向けて立っていたもう一人の少女。

あの少女が誰だったのかハッキリ思い出した。

そして無意識のうちにこう言っていた。

「ハヤトさん！許可と一緒に...黒月姫様にも参加してもらおうっていうのは駄目でしょうか。」

みんながびっくりして私のほうを見た。

自分でもびっくりしてる。なんでこんな事言ったんだらう。

「ちーちゃん、どうしちゃったのっ！？」

「通りすがりの冒険者と花見なんて...あの気位の高い姫様は怒るんじゃないか...？」

確かに怒られるかもしれない。

でも私はもう一度あのお姫様に会いたい。

本来なら私が訪ねていくのが礼儀なのだろうけど、桜の木の下で、誰もが自然に笑顔になれるその場所で、もう一度お姫様と話がしたいと思った。

「だ、駄目でしょうか...」

みんながあまりにもビックリした顔で見ているので少し不安になった。
そんな大それた事...言っちゃったのかな私。

「お、お城で一人にいるよりはずっといいかと思って...あはは。」

つい、適当に誤魔化してしまう。

でも夢を見たから話がしたいなんて言ったら怒られちゃいそうだし...

「承知した。簡単にはいかないとは思いますが...説得してみよう。」

好きと嫌いとは花より団子

桜の花びらが舞っている。

このジェンディアに時間という意味の季節の概念はない。

大陸の場所ごとに四季が分かれている。

そしてここ、アオイチの季節は...春。

「くーひゃ〜ん！くーひゃんも、ほらお団子食べふあよっ！おいひいんだよ〜っ！」

口いっぱい団子をほおばり、さらに両手に一、二...六串も団子を持ってキャナがやってきた。
私たちは今、お花見の真っ最中だ。

「はいっ！どうぞ！もぐもぐ」

「キャナ...始まってからずっと食べっぱなしじゃない...？お腹壊すよ。」

「んぐんぐ...だいじょうぶだよ〜！甘いものは最強なのっ」

「...意味がわからないよ。」

「それにね！花より団子って言うでしょ？いっぱいお団子食べないと駄目なんだよ〜」

「キャナ...それはお前みたいなヤツの事を言うんだ...」

いつのまにかクロムも来ていた。

「キャナ、チハル。今日はありがとな。」

「ほごっ」

「あっ、キャナがお団子詰まらせてる！？」

「なっ！？」

「えほえほっ、は〜びっくりした！まさかくーちゃんがデレるなんて...！」

「そっちかよ！」

「いえいえ、どういたしまして。」

「どういたしまして〜っ」

「別にはっきり言わなくてもいいッ」

「あれ？くーちゃんデレの次はテレてるのかな〜？」

「あーもう！お前達といると本当に調子が狂う！！」

クロムが笑いながら言う。

こんなに楽しそうなクロムの顔、初めて見たかもしれない。

「今日はお花見ができて、本当に良かった。」

心からそう思った。

「俺もだ。」

「あたしもっ」

桜の花びらをたくさん乗せて、風が私たちの合間を走り抜ける。

「私、二人に出会えて良かった。」

「き、急に何こっばずかしい事...!？」

「私達、全然違う世界から来て生きてきた環境も性格も全然違うのに、それでも今こうして一緒にいる。」

「そうだね～。考えてみたら不思議。」

「それが仲間っていうやつなんだろ。」

「っぷ。くーちゃんおっさんくさ～い！」

「な、なんで俺だけ...!？」

元の世界に帰りたい。そう思うときもある。

だけど、私がこの世界で何をすべきなのか。

それがもう少しでわかる気がする。

そしてそれは二人がいてくれたおかげ。

二人には、話しておこう。

私が見つけたこの旅の意味を。

「ねえ...キャナ、クロム。聞いてほしいことがあるんだ。」

もう少しで日が暮れる。

「ハヤトさん...こないね～」

「やっぱり...無理だったのかな。」

私は黒月姫を待っていた。どうしても彼女に会って確認したい事があったから。

お花見の許可だけは、先に降りた。ハヤトから矢文が飛んできたからだ。

姫様については、『しばしまたれよ』とだけ書いてあった。やっぱり説得に時間がかかっているのだろうか。

「でも来てくれないとくーちゃんが...」

「いや、大丈夫だよ。もし話が出来なくても私のやることは変わらないから。」

「え〜...でも〜...」

気持ちを整理するために一人で歩いてこよう。

「ちょっとだけ一人で散歩してくるね。」

湖のほうにいくつもりだったのに、足は自然に黒月城に向かっていった。

お城に行っても黒月姫に会えるわけじゃないけれど...

正面からお城を見上げる。やっぱり立派で大きい城だ。

と、お城から何かが飛んできた。紙に石の重しが...手紙だ！

『城の裏にまわってみるといい。』

そう書いてあった。手紙の落ちてきたほうをみると城の上部の窓からハヤトさんが見えた。

どうしたことだろう。あそこにいるって事は説得には失敗しちゃったのかな。

お城の裏に何かあるっていうんだらう。でも、ハヤトさんが行けというなら何かがあるはずだ。

私は走った。走って裏側からお城を見上げた。

そして、見つけた。

少しだけ見上げた場所に私の会いたかったお姫様がいた。

声をかけようか悩んだ。でも...ここからだとは少し遠い。

姫様のいる窓の横に伸びる桜の木。そうだ、あそこに登れば...会話くらいできるかも。

木登りなんて子供のとき以来だけど...

「よいしょっと。」

黒月姫はまだ私に気がついていない。もう少しだけ近くに。
この辺りならたぶん大丈夫。深く深呼吸。

「お姫様。」

「だ、誰っ！！！」

怪しいものじゃ...と言いかけてやめた。
今の私はどこからみても怪しいものだ。

「私の名前はチハルといいます。突然のご無礼お許してください。」

「チハル...？あなた、前にも一度わたくしのところに来たわね。」

「覚えていてくださったのですか？」

まさか自分の事を覚えていたなんて。前回たずねたときの態度...そんなにひどかったのだろうか
...

「べ、別にわざわざ覚えていたわけじゃないわ！わたくしを訪ねてくる冒険者はいつもイリスとの旅の事だけ聞いてきた。でも、あなた最初に『この街はとてもキレイな街ですね。街のみんなが姫様と桜を大好きだというのが伝わってきます。』っていったでしょう...！あまりにも変な事いうもんだから嫌でも記憶に残っちゃったのよっ」

黒月姫はいきにくしたてた。

そういえばここからはお花見の会場が良く見える。みんなの笑い声も微かに届いている。
もしかしたら、私達は嫌われているわけじゃないのかな。

「だ・か・ら！それであなたの事を気にしてたわけじゃないんだからっ！！」

私...姫様にそんなこと言っていたのか。

あの時は素直に思ったことを口に出しただけだったような。

でも、どうやら好印象を与えていたらしい...って事で合ってるよね？

それなら話は早いのもかもしれない。私が伝えたかった事を伝えよう。

「姫様、今日は姫様に話があって参りました。聞いてもらえますか？」

「少しだけなら...話してもいいわよ...」

「私は今、仲間と共に一緒に旅をしています。旅の目的は...姫様も知っての通りの理由ですが...」

急にこの世界に飛ばされてきた事。先のみえない不安。
その途中でキャナとクロムという素敵な仲間に出会えた事。
旅を続けていく中でずっと抱えてきた思い、全てを話した。

「私達の旅の終わりはわかりません。だけどいつか、私は元いた世界に帰る事になります。私の仲間たちもそれぞれ自分のもといた世界へと帰るでしょう。」

そう言ったとき、姫様は急に私に背を向けた。

「どうせ別れる事になるんだから...最初っから出会わなければいいのよ。」

小さな声だったけどそう聞こえた。

「そうでしょうか？別れが辛いから出会わないほうが良かった。姫様は本当にそう思いますか？」

返事はない。私は続けた。

「私はもし元の世界に帰っても、二人の事は忘れません。一生会えなくなっても絶対に忘れません。」

「そんなの！今一緒にいるから...だからそう思えるのよっ！！」

黒月姫は泣いていた。

「友達に裏切られた事も！信じていた人に捨てられたことも！突然の別れも...何も...何も知らないくせに...」

「...確かに私は、姫様の辛い体験の事は...わかってあげられません。」

彼女は私には想像もつかないほど泣いて、苦しんだのだと思う。

「でも姫様。姫様にはまだチャンスがあるじゃないですか。」

私もつられて泣いていた。

「姫様と仲間の旅は終わってしまったのかもしれませんが。だけどイリスにはまだ会えるんですよ。」

「あんな...あんなこ...」

「イリスもきっと姫様の事待っているとおもいますよ。」

「そんなこと...あるはずない...わたくしはイリスが...嫌いなの...」

「嫌いでもいいと思いますよ。」

私がそう言うと、黒月姫がこちらを振り返った。

「...!？」

「本当に嫌いかどうかは姫様が一番わかっているとおもいますし。」

「わたくしはあなたも...嫌いよ。」

あらら、嫌われてしまったみたいだ。

「イリスに会って、言いたい事がありますよね？本当は。」

「わたくしに限って...そんな事ないはずだけど...まあ、イリスとは付き合いも長かったし...少しだけならあるかも...しれないわねっ」

「では、私が全力でイリスを助け出します。そしてこの城にイリスを連れて参りますよ。」

「そしたらあのこに今度こそちゃんと文句をいってやるわ！」

「あはは、頑張ります。」

「あなた頼りなさそうだし、あまり頑張らなくてもいいのよ。」

イリスを助け出す事。私の旅の目標。

でもそれは世界を救うためじゃない。

大切な仲間を、友達を、イリスとその仲間達に失わせない事。

キャナとクロムに出会って決めた私の目標。

失いたくない仲間。

イリス達もそれはきっと一緒に、離れ離れになってもきっと互いを思いあってる。

そんな彼女達がまたみんなで笑いあえるように。その瞬間のために私は旅を続けていこう。

「姫様、お話はこれで終わりです。さあ、お花見会場に行きましょうか！」

「えっ！ちょ、わたくしは別にお花見なんてしたくないわ!!!」

「あー、ほら見てください。あそこで団子を大量に持ってるのがキャナって言って食い意地が...

」

「ああっ！どこなの！小さすぎて見えないわ！」

「では、参りましょうか」

「っ！？！？」

「早く行かないとお団子全部食べられちゃいますよ？」

「す、少しだけ...様子を見るだけなら行くわ！」

アオイチの湖に夕日が沈む。湖のほとりの桜色も全てが橙に染まってゆく。
この街は本当にキレイだ。きっとこの街のお姫様の心を映しているのだろう。

エピローグ

声が聞こえる。

少女の泣いている声が。

こんな夢を前にも見た気がする。

泣いている少女の隣にもう一人の少女。

そして泣いている少女に手を差し伸べた。

泣いていた少女が顔を上げ、互いの手と手がしっかり握られる。

二人の表情は良く見えないけれど、きっと笑っているのだろう。

これはきっと夢ではなくて、いつかみる未来。

私の願望が見せる幻なんかじゃない。きっと、絶対に。

—彼女達の名前はイリス、そして黒月姫。二人なら大丈夫。

「チハルー！もう朝だぞー...む、チハルのやつ今日は寝ながら笑ってるぞ。」

「ホントだ～！よっぽど昨日のお花見が楽しかったんだね！」

「ああ、チハルがお姫様を連れてきたのにはびっくりしたけどなあ。」

「ちーちゃんの笑顔には不思議な力があるの！お姫様もイチコロだったんだよ～！」

「ははっ。違くない」

そして、私たちの冒険は続いていく—